# 第5回スカイコート学生プランニングコンペ テーマ座談会レポート

## 課題

「滞留と対流」
“受け継ぎ留めるものと、流れと活動を生み出すもの”

建築家
御手洗龍建築設計事務所代表
御手洗 龍

×

建築家
河野有悟建築計画室代表
河野 有悟

×

建築家
仲建築設計スタジオ共同代表
仲 俊治

今年で「スカイコート学生プランニングコンペ」は第５回を迎えます。今回、新しい審査員として御手洗 龍氏と仲俊治氏に加わっていただきます。応募開始に先立って、本コンペの印象や今回の課題について、審査員の皆さんに話し合っていただきました。

### スカイコートの「学生プランニングコンペ」とは

**第４回の課題は「『進と新と深』“適応への可能性、建築の可能性”」。過去開催の中でも最も抽象度の高い内容でした。**

**河野**　前回は課題テーマを検討していく中で「進化」という言葉がでてきました。一般に「進化」というと新しい工法や材料のような技術的革新や開発をイメージされることが多いように感じます。建築に於いてはそうしたもの以外に、空間の成り立ちや、その有りようや変遷から、新たな選択肢が提示されていくことも、重要であると考えていました。例えば、場所や人の暮らしという点から深堀していくと多様な個別解がでてきます。それがまた次の時代の進化のベースになっていくと思います。他にも様々な解釈や展開可能な言葉であって、そんな抽象的な課題だったからこそ、多様な作品が集まったように思えましたし、その結果、当初は予定になかった特別賞も生まれました。

**仲**　今回初めてお声がけいただいて、審査時期が 3 月であることが印象的でした。

**河野**　そうですね。このコンペは、学校の授業や課題提出などが、落ち着いて春休みに入る時期に毎年開催しています。他のコンペと時期が重なりにくいこともあり、学生にはじっくり作品と向き合ってほしいと思っています。

**御手洗**　集合住宅はよく学校の課題でも取り扱われるので、1 年間の活動を振り返ってやり残したことを作品に昇華してもらえたら良いですね。

河野 有悟氏

### 学生時代の経験

**学生時代にアイデアコンペに参加した経験はございますか。**

**御手洗**　多くの大学は 1 年生から建築の授業が始まりますが、僕が通っていた大学は 3 年生からが本格的なスタートでした。そのため、授業が忙しく、あまりコンペに参加する余裕がありませんでした。でも、それでも挑戦する人もいて、友人が大賞を獲ったときは周りがざわつきましたね（笑）

**河野**　私の大学は 1 年生から設計の授業がスタートしたので、比較的に早い段階からコンペに挑戦する人が多かったです。同級生の中から初めて受賞者が生まれたときや、誰かが入賞したときなどは、都度、話題になっていたのを覚えています。学内だけに留まらずに、外へ意識を広げ挑戦していこうとする空気感があって、振り返ってみると、その後につながる良い経験だったと思います。

**仲**　コンペに参加する際に複数人で協力しながら取り組むことが良い結果につながっていたように感じます。「こんなのどうかな？」という気楽な会話から、何を目指しているのだろうという骨太な議論まで、色々なコミュニケーションを経ながら案を練っていくことが好きでした。

**河野**　私が学生の頃、同じコンペの入賞者で今でも交流が続いている人もいますが、確かに、コンペは個人勝負という印象が強かったです。受賞者の中には「また、この人が入賞してる」というようなコンペ常連みたいな方もいました。

**御手洗**　今教えている学生を見ていると、グループでコンペに挑戦している方が多いです。何度も取り組んでいて 1 人で続けていくことが難しい時には、グループを組み直してモチベーションを高めながら挑戦しているように見えます。

**河野**　確かに、前回のコンペでもグループ参加が結構ありました。そこには、個人の想いを形にするというスタイルに対して、チームでアイデアを出し合って作品を作り上げていくプロセスと、そこから立ち上がる作品に特徴がでるように思います。様々な参加の仕方や創作プロセスが提案の多様性をさら広げることにつながれば良いですね。

### 「建築」から「社会」を読み解く

**今回の課題は「『滞留と対流』“受け継ぎ留めるものと流れと活動を生み出すもの”」。どのような想いがございますか。**

**河野**　例えば、今の社会に対して考えてみると、いろんな見方ができると思います。少し停滞しているようにも、すごい早さで変化しているようにも感じ、どちらにも捉えることができ、この相反するような要素が同時に存在しています。社会をどう捉えるかは、実はとても多様です。このように、建築を設計するときにも、対極的で相反しつつ、それらが同時に存在するような視点、考え方、事柄が多くあると思っています。今回のテーマである、対極的で相反する「滞留と対流」という言葉をきっかけに、建築にまつわる様々な対象について思考を幅広く展開し、投影してもらえればと思っています。

**御手洗**　建築の本質的な部分に触れられそうな課題文になっているように思います。建築はもともと厳しい自然から身を守る殻のような存在として立ち上がったものです。だからと言って、自然から完全に隔離してしまうと建築の進化は止まってしまいます。そこにどう流れを入れていくかということが、建築の目的であり、矛盾です。生物はエントロピーが増大する方向に進んでいきます。そこで何を留め、どう流れを呼び込むか、両側面から考えていくと色々なアイデアが浮かんできそうですね。そこに抽象的な内容だけでなく、提案者の実感が盛り込まれているものが、見る人の共感を得る大きな要素になってくると思います。

**仲**　人間は一人では生きられないから、みんなで集まって生きていかなければいけません。そうしたときに自分だけ

の居場所以外にも共に暮らす人との空間、あるいは地域に 住む人とどう関わっていくかが問われます。地域社会の中にある人や自然の流れを取り込んだり、あるいは違う流れを混ぜてみたりすることで、新たな交流や交換の場が生まれることがあります。

**河野**　集合住宅というと都会に建つ高密度な建築ばかりが、想像されやすいですが、集合住宅の意味合いを広くとらえて、「集まって住む」という視点でみれば、共同体を成しながら生活している場が広く含まれてきます。都市部はもちろんのこと、多様な場に設計者がどんな価値を与えられるか、様々なアイデアが生まれることを、とても楽しみにしています。

**仲**　大都市のにぎやかで高密度な建物はなんだか良く見えるものです。その一方で、少しずつ縮退していく日本において、寂しくなっていく地方都市が増えています。自分たちの場所と他者が入ってくる場所にどう折り合いをつけるかといった用途複合の話や、一人二役のような重ね使いが同じようなテーマとして捉えられる。そんな幅の広い提案が期待できる課題文になっていると思います。1 つの課題からスケールやエリアの幅広い提案が集まりそうですね。

**河野**　ぜひ、そうであってほしいと思っています。学内で志向しているものを外に出して、色々な価値観に触れてみる。そして、応募者や受賞者の思いやアイデアが共有され積み重なっていくことが、このコンペの良いところだと思っています。アイデアや考え方の提示をすることも大切ですが、そこで留まらず、学生たちが思い描いたものが、種子のように、やがて実際の空間や建築へとつながり展開する未来を見られたら嬉しいです。

仲 俊治氏（リモートにて参加）

**御手洗**　集合住宅のように戸数が多いと必要となる構成やシステムから解くということもありますが、住む人の視点や実感が出て初めて面白いと感じます。その両方の視点が表れる作品が見たいですね。

御手洗 龍氏

## 「新たな未来」を描く君へ

### 応募される学生の皆さんに伝えたいことはありますか。

**河野**　アイデアコンペは一般的な学校の課題と違って敷地や規模などの与条件がありません。一方で、比較的抽象度の高い課題から具体化して作品に仕上げていきます。そうやってできた作品がそのまま、現実の建築として諸条件を満たして建築されるということはないかもしれません。しかし、作品に投じた考え方や想い、それらを形にするプロセスに価値を見出すことが重要で、それこそが実際の建築設計にも活かされてくるものです。少しでも多くの、そうした発見に出会えることに期待をしています。

**御手洗**　集合住宅は社会と深く関わりを持つため、設計を通して社会を見るという視点も必要になります。今の時代から得た実感を設計につなげていくと、少し先の未来を見据えることにもなります。社会や時代について考えを深めていくうちに自分の軸や進むべき方向が少しずつ見えてくるものだと思います。これから実務を経験する学生にとって、アイデアコンペは準備運動のように、自分を見つめる良い機会になるはずです。また、実務の実施図面を描くときにも、アイデアや想いは、窓の大きさや高さ、物のおさまりなど、細部の決め手にもなっていきます。提案への想いが強いことで、そこに住む人や使う人を深く想像できるようになればと思います。

**仲**　建築も発明できると思うのです。建築には標準マニュアルのようなあらかじめがあって、それを習得すれば建築家になれると思う方もいるかもしれません。でも、決してそういうことではありません。自分がどのような場所で、どのような関わりの中で暮らしたいかというビジョンを集合住宅に反映すべきです。例えば、電話は、ベルさんが発明したといわれています。そのきっかけは、遠くに住む体の悪い親戚と会話がしたいという夢から生まれたそうです。そして、電話は技術の発明が集積され、集落に 1 台、家庭に 1 台、そのうち無線化して、いまは 1 人 1 台、それも音声以外の情報を送れるスマホになりました。ベルさんの電話が自然にスマホに化けたわけではありません。それぞれの時代で、技術者たちの「未来はこうあってほしい」という想いが原動力になっています。いま僕たちが慣れ親しんでいる住宅も同様で、この 150 年ぐらいの中で発明された空間に暮らしています。だから、いま見ているものをなぞるのではなく、自分の思い描く未来の集合住宅を発明してもらいたいと思っています。ただ、具体性もないと提案としてぼんやりしてしまう。提案の中にもリアルを感じられる要素を入れることが非常に重要です。

**御手洗**　上手に解けたというよりは、提案する人の想いが感じられたら嬉しいです。提案者の楽しさやわくわく感が伝わってこちらも住んでみたいと思える作品に出会いたいです。

**河野**　集合住宅は住戸や動線の配列などによる、既にある形式を当てはめるような手法で、与条件を満たし解くだけで成立させてしまう設計も多くあります。できれば、既知の選択肢の編集による構成ではなく、問いかけに対して簡単に満足せずに新たな可能性を考えてみる。そこから発見したものを建築の設計に活かしてほしいと思っています。新たな選択肢を提示しよう！という思いの込められた作品に多く出会えたら嬉しいです。

(2024年10月25日、スカイコート本社にて、文責：スカイコート株式会社「学生プランニングコンペ」係)

### 審査員 藤原茂からのコメント
## 新たな発想が「未来の建築」を創る

スカイコート株式会社
代表取締役社長 兼 CEO
藤原 茂

当社では、主に単身者用の集合住宅であるマンションを新築分譲して参りました。そのマンション建築に限ってみても時代と共に様々な進化を遂げてきました。人口動態や社会環境の変化、そして行政機関の条例等による指導要綱により、建物の戸当り面積や設備はもちろん省エネ基準などの環境性能も変化してきました。

新築完成時には、快適だった住宅でも、時代の変化を経て、その時代の生活様式からすると狭いな、古いな、不便だなと、感じることも普通に起きてきます。その際、建物はどうなるのか。

新築か、リフォームか、リノベーションか、選択肢は様々です。つまり、建築の未来にも「滞留と対流」があると思っています。新たに生まれるものと受け継がれて進化していくもの。これまでにない新たな発想が建築の次の未来を変えていくことになるでしょう。

### アイディアコンペについて

実務で建築を設計する過程では、敷地条件や道路条件、用途基準や様々な法令、周辺環境等の与条件から、そして一番重要となる予算、いわゆる建築コストの許される限りで作品を作り上げていきます。しかし、本コンペはアイディアコンペです。与条件も予算もありません。そして正解もありません。その自由さがゆえに、難しさも伴います。一人で創り上げるのか、あるいは、仲間と共に作品を創り上げるのか、その過程では、自由な発想がぶつかり合う場面もあるでしょう。ただ意見を折衷するだけでは、中途半端な結果に終わってしまうかもしれません。お互いの価値観を新しい発見と捉え、積極的に議論を深めることが、より良い提案につながるはずです。是非、学生時代にその過程を沢山経験して頂けたらと思っています。

本コンペを通じて、建築の未来について皆さんと一緒に考え議論し、新たな可能性を模索していきたいと思います。